

〈論 文〉

## 英語歌詞の中の否定表現

— 非標準変種の二重否定と *Ain't* —

山 田 政 通

### 要 旨

本稿では、英語の歌詞に用いられた非標準変種である二重否定と *ain't* に焦点を合わせ、社会言語学と談話分析の視点からその特徴と働きを分析した。非標準変種には「潜在的威信」があると言われるが、そのような非標準変種を使うことは、それを使う仲間同士にグループ内の連帯意識を作り出す働きがあると考えられる。対人関係の視点からは、連帯意識を共有する人たちの間の関わりを促進することになる。

本稿で扱う二重否定とは、否定が繰り返され、かつ最終的な意味も否定的になるものを指す。このような非標準変種の二重否定の使用は、標準変種に比べて有標な言葉遣いであり、それだけ聞き手の注目を集め、結果的にそこに込められたメッセージを強化する役目を発揮する。具体的には歌詞中での歌い手の主張の強化や窮状描写の強化に繋がることが分かった。*Ain't* の分析では、二重否定の分析同様、歌詞中での主な機能はメッセージを強化することで、主張の強化を示す例と窮状描写の強化を表す例が確認された。

一般に、標準変種の使用が主流の談話中で非標準変種が使われる時は、その使用には何らかの特別な意味が付加されると考えられる。本論のデータとなった歌詞でも、歌詞の中で使用される非標準変種には、楽曲作者の特別な意味が含まれていた。歌詞中の非標準変種は、潜在威信を持ち仲間意識を創り出し、聞き手への働きかけが強化されることが明らかになった。

キーワード：否定表現、非標準変種、二重否定、*ain't*、英語歌詞

## 目 次

1. はじめに
2. 非標準変種
3. 二重否定
4. Ain't
5. その他の非標準変種
  - 5.1 There's (no) + 複数名詞
  - 5.2 主語・動詞の呼応の不一致：Don't
  - 5.3 Those の代用としての Them
6. 結語

### 1. はじめに

本稿では、英語の歌詞に用いられた非標準変種 (non-standard variety) の内、二重否定と ain't に焦点を合わせ、その特徴と働きを社会言語学と談話分析の視点から分析した。この分析は、英語歌詞中の否定表現を分析した山田 (2023) で、今後の課題として示された研究対象であった。

今回非標準変種を研究対象にする理由は、個人的な観察から、現代英語で実際に使用されているにも拘わらず、その使用実態は明らかにされていないと感じるからである。非標準変種は歌詞に限らず、ニュース報道 (特にインタビュー)、映画やドラマなどでもよく耳にする。この傾向はアメリカ英語で特に顕著であるようだ。その一方で、従来の英語の文法研究やその他の分野での研究でもメインの課題になることは少なく、その実態は不明な部分が多い。例えば、Tottie (1991) は、コーパスを活用した否定表現の実践的研究として高い評価を得ているが、本稿で取り上げる二重否定や ain't は分析の対象外となっている。それは、同書があくまでも否定表現の標準変種を研究の対象にしているからである。本稿は、これまでの否定研究では見過ごされることの多かった非標準変種に焦点を当てる点でユニー

クな研究となる。今回は歌詞という限られたジャンルであるが、実際の非標準変種の使用を調査し、現実の英語使用の一端を実証的に捉えたい。

歌詞をデータとする理由は、その中には日常生活の言葉遣いが反映されているであろうと考えたからである。文学作品としての詩は書き言葉が中心で、文語的な要素が強いであろうが、歌詞は、歌われることを前提としているので、話し言葉が中心で口語的な表現を多く含むと考えられる。また、データとした100曲の英語の歌詞は、著者自身に馴染みが深い1960年代から2000年程の間のヒット曲から取った（選曲の基準、歌詞の特徴や留意点など、データについての詳細は、山田2023を参照のこと）。

本稿の全体構成は以下の通りである。次節の2では非標準変種の一般的な特徴を社会言語学と談話分性の観点から解説する。その後は具体的な変種の分析に入り、3では二重否定の事例を、4ではain'tの事例を取上げる。どちらもメッセージの強化効果を中心に検証する。5では、それ以外の非標準変種を取上げる。最後の6は結語で、全体のまとめと今後の課題を述べる。

## 2. 非標準変種

英語の歌詞を分析していくと、時折非標準変種と見なされている英語が使われていることがある。それほど頻繁ではないが、使用されている部分を精査すると、そこには非標準英語を使う特別な効果があるようである。本稿では、否定表現に関する非標準英語の代表例として、歌詞の中での使用が比較的多く確認された二重否定とain'tの2つを見ていく。

一般にある言語の非標準変種 (non-standard variety)<sup>(1)</sup> はマイナスの社会的評価（「間違っている」、「品がない」、「訛っている」など）を受けるが、同時に「潜在的威信 (covert prestige)」という現象があることが社会言語学の研究で指摘されている<sup>(2)</sup>。潜在的威信とは、社会的に低く見ら

れている非標準変種を逆に望ましいと見なす意識を指す (Holmes and Wilson 2022 : 573 ; “positive attitudes towards vernacular or non-standard speech varieties”)。これは地域方言、若者言葉、男性言葉などの例がよく挙げられるが、思春期の若者がスラングをよく使うのもその例である。潜在的威信の対象となる非標準変種を使うことは、それを使う仲間同士に「グループ内の連帯意識 (within-group solidarity)」 (Swann et al. 2004 : 249) を作り出し、心理的繋がり (rapport) が生まれると言われている。

対人関係の視点から見ると、潜在的威信を伴う非標準変種を使うことは、連帯意識を共有する人たちの間の「関わり促進 (involvement)」 (Tannen 1989 : 12) を強化することになる。このような場面での非標準変種の使用は、仲間意識を強化し、聞き手との距離感を縮め、プライベートな会話をしている雰囲気を作り出す (Holmes and Wilson 2022 : 573)。

Yamada (2003 : 402) は談話上の有標性の観点から、物語中の否定文の機能を分析した研究であるが、否定文には聞き手の注目を引き付ける (attention-catcher) 働きがあると分析した。また、この特徴は物語を語る際の修辞上の技法としても効果的であると結論付けた (Ibid., p. 403)。聞き手の注目を引き付け、修辞上の効果的な技法として働くという点は、歌詞で使われる非標準型の否定表現にも同様に当てはまると考える。

### 3. 二重否定

#### 3.1 二重否定の特徴

英語の歌詞を分析していく過程で、非標準変種の例として二重否定 (double negation) が頻繁に出てくることが確認できた。イギリスのロックバンド Pink Floyd の *Another Brick in the Wall* (1979) という曲の冒頭に出てくる “We don't need no education.” のような文で、1文中に複

数の否定辞が出てくるが、全体の意味内容としては標準英語の “We don't need (any) education.” のように否定となる。本稿で扱う二重否定とは、否定が繰り返され、かつ最終的な意味も否定的になるものを指す（二重否定が肯定的な意味になるのは、標準変種なので含まない：例えば、Nobody has nothing to offer. が Everybody has something to offer. という肯定の意味合いになる場合である）。以下の一般論では、研究者（特に社会言語学者）の多くが二重否定も含めて多重否定（multiple negation）という包括的な用語を使って議論しているので、それに従うことにする。しかし、山田（2023）でデータとして使った英語歌詞 100 曲では、否定辞を 3 つ以上含む多重否定の例は皆無で、全て二重否定であったことをここに付記しておく。否定辞を 3 つ以上含む多重否定はかなり限定された文脈の中で初めて可能であろう。二重否定と否定辞が 3 つ以上の多重否定は、ただ単に否定辞の数の問題にとどまらず、使用条件（産出と理解の際の認知上の負荷なども含めて）に相当な違いがありそうである。

社会言語学の観点から、Holmes and Wilson（2022：213）は、「多重否定は調査された全ての英語圏の共同体で確認された文法構造であり（“Multiple negation is a grammatical construction which has been found in all English-speaking communities”）」、また「中産階級より下層階級の人の話し言葉により頻繁に用いられる（“it is much more frequent in lower class speech than in middle class speech”）」と述べている。さらに、Holmes and Wilson は「多重否定は、非常に顕著な日常語の形式であり（“Multiple negation is a very ‘salient’ vernacular<sup>(3)</sup> form”）」、「中産階級の話し手はこれを避ける傾向があるのに対し、下層階級の話し手は気軽に使う傾向がある（“Middle-class speakers tend to avoid it, while lower-class speakers use it more comfortably”）」とし、使用には階級差があると指摘している。最後に、Holmes and Wilson（2022：261-262）は、黒人英語の特徴でもあると付け加えている（“It is also a feature of AAL”

(AALは African American Language の略で Black English を指す [著者追記])。話し言葉の分析で新たな境地を開いたと定評のある Biber et al. (1999: 178) は、多重否定は、「社会的には非難されるが、くだけた話し言葉に見られる、長い歴史のあるパターンである (“a very old pattern which is found in casual speech although it is socially stigmatized”）」と述べ、この使用には「強化の効果があるようだ (“appears to have a strengthening effect”）」と特徴づけている。

以上の記述から多重否定は中産階級より下層階級の人々のくだけた会話中により頻繁に使われること、さらに黒人英語の特徴でもあり、その使用には強化効果があることが分かった。

### 3.2 分析結果と考察

Biber et al. が指摘する「強化効果」という観点から、データ中の二重否定の例を精査すると、確かにメッセージを強化する働きがあることが確認できた。さらにその強化されたメッセージには、大きく2種類あることが分かった。①主張の強化と②窮状描写の強化である。前者は、歌い手の本音や本心を暴露するような表現となり、心の叫びとして強い主張を実現する働きをする。一方後者は、窮状描写の強化で、不利、苦痛、諦めなどの窮状（ネガティブな状況）を強調して描写するために使われていた。以下では、二重否定が①主張の強化と②窮状描写の強化に使用されている代表例を2つずつ見ていく。

#### ① 主張の強化

最初の例は、主張の強化の例である。この曲は、画一的な学校教育に対する反発を歌ったものである。歌詞の第1連の出だしの2行で二重否定が使われている。(歌詞情報は、【 】内にタイトルと発表年だけを示す。例示では、「連 (stanza)」はローマ数字 (I, II～) で示し、「行」はアラ

ビア数字（1, 2, 3～）で引用歌詞の左側に記す。また、分析対象となる否定表現は下線で示し、その否定表現（とそれに関連する部分）を含む行には左端に矢印（⇒）を付す。）

### 1 【Another Brick in the Wall, 1979】

I

⇒ 1 We don't need no education

⇒ 2 We don't need no thought control

3 No dark sarcasm in the classroom

4 Teacher, leave them kids alone

5 Hey! Teacher! Leave them kids alone

6 All in all it's just another brick in the wall

7 All in all you're just another brick in the wall

歌詞の冒頭で、非標準変種の二重否定を連続して使用し、学校や思想統制などいらないというメッセージを一般庶民の率直な思いとして力強く表現している。標準英語なら “We don't need (any) education” となるであろうが、二重否定を使うと「教育は不要だ」というメッセージがより強化されるであろう。

2番目の例は、若い男性から女性（Paula）へ贈るラブ・ソングである。4行目に二重否定が見られる。

### 2 【Hey Paula, 1962】

I

1 Hey, hey Paula, I want to marry you

2 Hey, hey Paula, no one else will ever do

3 I've waited so long for school to be through

⇒ 4 Paula, I can't wait no more for you

5 My love, my love

4行目では、「もうこれ以上絶対に待てない」という若者らしい一途な思いが二重否定と共にストレートに表現されている。標準英語では“I can't wait any more for you”となるが相手の心に訴えかけるインパクトは弱まるであろう。

## ② 窮状描写の強化

以下の2例は、窮状描写の強化として使用されている二重否定の例である。次の歌は、社会に対する若者の不満を代弁する歌である。“I can't ~”の表現が繰り返され（1, 2, 4, 10行目）、若者の現状への怒り、不満、鬱憤などが力強くストレートに表現されている。

3 【(I Can't Get No) Satisfaction, 1965】

I

⇒ 1 I can't get no satisfaction

⇒ 2 I can't get no satisfaction

3 'Cause I try and I try and I try and I try

⇒ 4 I can't get no, I can't get no

5 When I'm driving in my car

6 And that man comes on the radio

7 And he's telling me more and more

8 About some useless information

9 Supposed to fire my imagination

⇒ 10 I can't get no, oh, no, no, no

11 Hey, hey, hey. That's what I say

第Ⅰ連の冒頭（1, 2行目）で、「満足できない」ことを非標準の二重否定を繰り返し使い、強力に表現している（ただし、曲中では、不満を大声でおちまけるのではなく、声量を控え、自らの本音を吐露するように控えめに歌い上げていて、鬱積した雰囲気巧みに演出している）。この「不満」はこの歌詞全体のテーマであり、その後も4行目、10行目で繰り返される。標準英語の“I can't get any satisfaction”と比べると二重否定を含む表現の方が、より力強いメッセージとなっている。さらに、第3連でも“I can't get no girl reaction”と二重否定で、自分の女性運のなさを嘆くところもある。この歌全体で、二重否定が繰り返し使われ、自分の不満を聞き手に効果的に印象付けている。

最後に上げる例は、ベトナム戦争の無意味さを、アメリカに戻った元兵士が体験した窮状を通して、訴える歌から取った。帰国し一市民として生活し始めたが、全て八方塞がりの状態であると歌う。引用する第Ⅷ連は、歌詞の終盤部分である。

#### 4 【Born in the U.S.A., 1984】

##### Ⅶ

1 Down in the shadow of the penitentiary

2 Out by the gas fires of the refinery

3 I'm ten years burning down the road

⇒ 4 Nowhere to run, ain't got nowhere to go

1行目から3行目で、刑務所のすぐそばにある精錬所で10年間きつい仕事で煮えくり返る思いをしてきたと述べ、4行目では、「逃げるところはなく、他に行くところも全然ない」と窮状について二重否定を含む否定表現を用いて語っている。後半の二重否定では、非標準変種のain'tと共起していて、さらに行き場のない閉塞感が強調されている。この部分は標



前述のように Holmes and Wilson (2022: 262) は、多重否定は黒人英語の特徴でもあると述べている。しかし、東 (2009: 80) の指摘の通り、黒人英語だけで使われるわけではなく、白人の英語でも使われるが、前者の方が高い使用頻度と考えるのが妥当であろう。本稿では 15 例の二重否定の例が確認されたが、黒人が関わる例は 1 例 (*Thriller*, 1982) のみであった。ただし、この曲を歌ったアーティストは黒人 (Michael Jackson) であったが、曲の作者は Rod Temperton という白人 (イギリス人) である。少なくとも本稿で見た歌詞の中では、二重否定が黒人英語と結び付きが強い傾向は確認できなかった。

非標準変種である二重否定の歌詞中での使用は、標準変種に比べて有標な言葉遣いであり、それだけ特別感を伴い、聞き手の注目を集め、結果的にそこに込められたメッセージを強化する役目を発揮すると思われる。具体的には歌詞中での主張や窮状描写の強化に繋がるのが分かった<sup>(4)</sup>。

#### 4. Ain't

Ain't は、(1) BE 動詞の am not, is not, are not や (2) 助動詞 HAVE の have not, has not の縮約形である。アメリカの黒人グループ The Jackson Five が歌った *ABC* (1970) の中に “Your education ain't complete” という一節があるが、標準英語では “Your education isn't complete” となる。Cheshire (1991: 54) は、「Ain't は 英米両国において非標準英語変種として広範にみられる特徴的な語である (“*Ain't* is a widespread feature of non-standard English dialects, both in Great Britain and in the United States”)」と述べている。Biber et al. (1999: 167) も「Ain't は広く非標準と見なされているが、実際には比較的広く使用されている (“*Ain't* is widely regarded as non-standard but is relatively widely spread in use”)」と言い、「頻度は高いのに容認されない語の代表例であり (“*Ain't*

is the paradigm case of a frequent though unacceptable form”)], また「しばしば、もう一つの非難される多重否定と共起する (“It often combines with another stigmatized form, viz. dependent multiple negation”: この dependent multiple negation は通常 of 多重否定と同じ [著者追記])」)と語っている (多重否定との共起については、後で触れる)。Huddleston and Pullum (2002: 1611) は、ain't は「イギリス英語では労働者階級の話し言葉には見られるが、学術的な談話では見られないので非標準である。他方、アメリカ英語ではくだけた口語体でより広く使用され容認されている (“In BrE, it [i.e. ain't] is reasonably called non-standard, occurring (for example) in working-class speech but not (….) in academics' discourse; but in AmE it is more widely used and accepted in informal style”)]」と述べ、英米語で違いがあると指摘している。

英語歌詞 (100 曲) 中には、ain't の使用が 11 例見つかった。10 例は BE 動詞 (is not に相当するものが 6 例, are not と am not に当たるのが各 2 例ずつ) で、助動詞 HAVE の例 (have not に相当) が 1 例あった。

前節の二重否定の機能分析では、Biber et al. (1999) で指摘された「強化の効果」という特徴に注目して分析したが、非標準変種である ain't の分析にもこの特徴を適用した。二重否定と同様に、ain't の使用は該当するメッセージの強化を促すと考え、さらに①主張の強化と②窮状描写の強化という 2 つに分類した。以下では、それぞれの代表例を 2 つずつ取り上げ、解説する。

### ① 主張の強化

最初の例は、迷信など信じてはいけないと諭す歌から取った。第 II 連の 3 行目に ain't が使われていて、聞く人に向けて迷信への警告を発している。

## 5 【Superstition, 1972】

## II

- 1 When you believe in things
- 2 That you don't understand then we suffer

⇒ 3 Superstition ain't the way

1, 2行目で「自分に理解できないものを信じると苦しむことになる」と語り、それを受け3行目では「(だから) 迷信なんか信じちゃダメだ」と警告している。ここでは標準英語の isn't ではなく非標準の ain't を使うことで聞いている人へ向けて自分の主張をより強化して伝達する効果があると考えられる。

主張強化の2番目の例は、幾多の苦勞を乗り越えた自分の半生を振り返る歌から取った。第II連では、ここまで何とか成功を収めてきたが、それは生易しいことでなく、これからも戦い続けると決意を述べている。その決意を表明する10行目に ain't が使われている。

## 6 【We Are The Champions, 1977】

## II

- 1 I've taken my bows
- 2 And my curtain calls
- 3 You brought me fame and fortune
- 4 And everything that goes with it
- 5 I thank you all
- 6 But it's been no bed of roses
- 7 No pleasure cruise
- 8 I consider it a challenge before
- 9 The whole human race

⇒10 And I ain't gonna lose

11 But we must go on, on, on

10行目は「だから、決して負けるわけにはいかない」という決意を、非標準の ain't と共に力強く歌い上げている。標準形の I'm not を用いるより、歌い手が自らの心情を直に吐露している感じが前面に出て、より強いメッセージをとまっている（また、この ain't は、それに続く非標準形の gonna と相性がよい）。

## ② 窮状描写の強化

ここでは、窮状描写の強化の例を2つ検証する。次の歌では、若くして結婚したが、学歴もなくいろいろな苦労を重ねてきた男が自分の辛い経験を語っている。2行目に ain't が使われているが、ここでは has not の代用である。

### 7 【The River, 1979】

V

1 I got a job working construction for the Johnstown Company

⇒2 But lately there ain't been much work on account of the economy

⇒3 Now all them things that seemed so important

4 Well mister they vanished right into the air

5 Now I just act like I don't remember

⇒6 Mary acts like she don't care

2行目では、「最近是不況であまり仕事がない」と述べているが、地元の労働者が語るように非標準の ain't を使い、窮状をリアルに訴えている。標準英語を用いて “～ there hasn't (又は there's not) been much work ～”

と平凡に表現する場合と比較すると、そのメッセージの強さの違いが明確になるであろう。また、この連には、3行目に them（標準形の those の代用：「大切だと思っていた全てのもの」）と6行目には don't（主語と述語動詞の不一致の例で、標準語では doesn't を使う：「[妻の] メアリーは どうでもいいという振りをしている」）などの非標準変種も使われていて、連全体で地元の労働者の言葉を再現する形で、自分たちの置かれている窮状を印象的に表現している。

最後の例は、アメリカ南部の貧しい家に生まれた男の子とその家族を取り巻く厳しい現実を歌った歌詞である。2行目の後半の関係詞節中に ain't が使われている。

## 8 【Living for the City, 1973】

I

- 1 A boy is born in hard time Mississippi
- ⇒ 2 Surrounded by four walls that ain't so pretty
- 3 His parents give him love and affection
- 4 To keep him strong moving in the right direction
- 5 Living just enough, just enough for the city

2行目の「それほどきれいではない4つ壁に囲まれて」とは、あばら屋を指している。みすぼらしい家の描写に敢えて非標準の ain't を使用して、みすぼらしさを率直に表現し、現実味を与え強調していると考えられる。ここでも標準形の aren't を用いた場合と比較すると ain't を使うことで粗末さがより生々しく伝わってくる。

以上、4つの代表例を見てきたが、全11例の分析結果を示すと、①の主張の強化を示す例が5例、②の窮状描写の強化を表す例が6例であった。全ての例の共通点は、メッセージの強化である。①の主張の内容は多

岐に渡り、生き方、恋愛観、迷信への警告、不屈の精神、友情の大切さなどである。また、②の窮状の内容も多彩で、閉塞感、加齢、感覚麻痺、貧困、就職難、身の危険などがあったが、共通してネガティブな状況の描写であった。既述の例以外の7例を以下に示す：

① 主張の強化 (3例)

- 1 Your education ain't complete 《主張の強化：生き方》  
【ABC, 1970】
- 2 Now, ain't it good to know that you've got a friend  
【You've Got A Friend, 1971】 《主張の強化：友情の大切さ》
- 3 And I ain't no fool for love songs 《主張の強化：恋愛観》  
【Still Crazy After All These Years, 1975】

② 窮状描写の強化 (4例)

- 4 Desperado, oh, you ain't gettin' no younger 《窮状描写の強化：加齢》  
【Desperado, 1973】
- 5 Ain't it funny how the feeling goes away?  
【Desperado, 1973】 《窮状描写の強化：正常な感覚の麻痺》
- 6 There ain't no second chance against the thing with forty eyes, girl  
【Thriller, 1982】 《窮状描写の強化：身の危険》
- 7 Nowhere to run, ain't got nowhere to go 《窮状描写の強化：閉塞感》  
【Born in the U.S.A., 1984】

【Ain't と二重否定の共起】

前述のように、Biber et al. (1999 : 167) は、ain't と多重否定は共起する傾向があると指摘した。本稿の歌詞のデータ内では ain't の例は 11 確認されたが、その中の約 3 分の 1 に当たる 4 例で多重否定との共起があっ

た。収集例は限られているが、上記の指摘に沿う傾向が見られたと言えるであろう。2つの例を見ていこう。

最初の曲は *Desperado*（ならず者）という歌であるが、これまで自由にやりたい放題のことをしてきた友に向かって、そろそろ落ち着き、自分の目の前にある幸せを大事にしたらと優しく諭している。第3連の最初の行に *ain't* を含む二重否定が出てくる。

### 9 【*Desperado*, 1973】

#### Ⅲ

- ⇒ 1 *Desperado, oh, you ain't gettin' no younger*  
 2 *Your pain and your hunger*  
 3 *They're driving you home*  
 4 *And freedom, oh freedom*  
 5 *Well that's just some people talking*  
 6 *Your prison is walking through this world all alone*

第Ⅲ連の内容をまとめると、「もう若くはなれない。心の痛みと飢えは人を自分の故郷へと向かわせるものだ。自由、自由というけどそれはただのたわごとで、一人ぼっちで世の中を歩くのは牢獄と同じだ」となる。この歌は、歌い手が友人に直接語りかける形式になっていて、1行目も非標準の *ain't* と二重否定を用いて、友人同士らしいくだけた言葉遣いで語りかけている。標準英語を使えば、“*Desperado, oh, you are not getting any younger*” となるであろうが、ここでは敢えて非標準変種を2つ連続で使うことで相乗効果を生み、相手との距離を縮め、仲間意識を強化していると考えられる。

2つ目の例は、昔の彼女と久しぶりに街で出くわし、昔を思い出し、今の自分のことを語る歌から取った。3行目に *ain't* を含む二重否定が使わ

れている。

10 【Still Crazy After All These Years, 1975】

II

- 1 I'm not the kind of man who tends to socialize
- 2 I seem to lean on old familiar ways
- ⇒ 3 And I ain't no fool for love songs
- 4 That whisper in my ears
- 5 Still crazy after all these years
- 6 Oh, still crazy after all these years

1, 2行目で「人付き合いが苦手で、昔ながらのやり方を好む人間」と自己を描き, 3, 4行目では「耳元でささやかれるラブ-ソングに浮かれるような可愛げもない」と語っている。自分からは進んで人間関係を作ることは苦手で, ロマンティックな関係に溺れることもしないと語り, 都会に暮らす現代人の孤独な心を代弁している。

3行目に非標準語法 (ain't と二重否定) が使われ, 語り手の男性の素の語り口によりその内心が吐露されている。この部分は, 標準英語で表現すれば “And I'm no fool for love song” となり, 強意の no があるのでそれなりに強い否定の意味が出るが, 3行目の例では非標準形の ain't と no が連続で使用され, 二重否定とすることで相乗効果を発揮し, さらに否定の意味が強化され強いメッセージを伝達している。

【まとめ】

一般に, 標準変種の使用が主流の談話中で非標準変種が使われる時は, その使用には標準変種の使用にはない特別な意味が付加されると考えられる。標準変種という無標な言語使用の中に, 有標な非標準変種が現れるか

らである。本論のデータとなった歌詞でも同様に、歌詞の中で使用される非標準変種には、楽曲作者の特別な意味が含まれている。社会言語学の見地から明らかなように、非標準変種は「間違っている」とか「汚い」などのネガティブな評価を受けることが多いが、歌詞中の使用では、潜在的威信を持ち、仲間意識を創り出し、聞き手への働きかけが強化されるなどの積極的な働きがあることが確認できた。

既述のように Huddleston and Pullum (2002 : 1611) は、ain't はアメリカ英語のくだけた口語体では広く容認されていると述べていた。本稿のデータで ain't が使用された 11 例に限ってみると、確かにアメリカ人アーティストが歌う曲中で ain't が使われていることが圧倒的に多かった（唯一の例外は、*We Are The Champions* (1977) を歌ったイギリスのロックバンドの Queen である）。ただ、例の数が限られているのでより多くの事例を調査する必要がある。

## 5. その他の非標準変種

否定表現に限定された用法ではないが、その他歌詞中に見られた非標準変種としては、以下の 3 点が見られたので簡単に触れておきたい。具体的には、There's (no) + [複数名詞] (5.1)、主語・動詞の呼応の不一致 (5.2) と those の意味の them (5.3) の 3 点である。

### 5.1 There's (no) + [複数名詞]

There's [There is] の後に来る名詞は単数形となるのが標準であるが、複数形の名詞が続くことがある。Biber et al. (1999 : 186) は、会話体ではよく There is/was + plural noun phrase (名詞句) となることがあると述べ、その場合 There is / was は、一つのまとまった単位として機能するとしている。特に現在時制は there's と縮約形となり、一層その傾向が

強いと述べている。データの歌詞中には2つの例が観察された<sup>(5)</sup>。

下記の例では、there'sの後に複数形の名詞が続くので、本来ならThere are (標準変種)を使うべきところである。最初の曲は、国境のない世界平和を訴える歌で、次はスリラー映画の悪魔が押し寄せてくると警告する歌である。

11 【Imagine, 1971】

II

⇒ 1 Imagine there's no countries.

2 It isn't hard to do.

3 Nothing to kill or die for,

4 And no religion too.

5 Imagine all the people

6 living life in peace...

12 【Thriller, 1982】

IV

1 They're out to get you

⇒ 2 There's demons closing in on every side

3 They will possess you

4 Unless you change that number on your dial

どちらの場合も、聞き手に語り掛け、反応を期待する場面なので、よりカジュアルな非標準変種が選択されたのであろう。前者では、聞き手に想像してほしいと依頼する場面であり、後者ではスリラー映画を見て隣に座っている恋人に(冗談半分に)怖い話をして気を引いている場面である。

## 5.2 主語・動詞の呼応の不一致：Don't

通常は主語の人称と数に応じて動詞の形が一致する（subject-verb concord）が、それが破られることがある。Biber et al. (1999 : 1051) は、この現象を concord（一致）でなく discord（不一致）と呼んで、会話体の特徴の一つに挙げている。

歌詞の中では、2例が見つかったが、両方とも *The River* という曲からである。この曲は、若くして結婚したが、学歴もなくいろいろな苦勞を重ねてきた男が自分の辛い経験を語る内容である。最初の例は第V連の6行目、2つ目の例はそれに続く第VI連の7行目に出てくる。

## 13 【The River, 1979】

V

- 1 I got a job working construction for the Johnstown Company
- 2 But lately there ain't been much work on account of the  
economy
- 3 Now all them things that seemed so important
- 4 Well mister they vanished right into the air
- 5 Now I just act like I don't remember
- ⇒ 6 Mary acts like she don't care

VI

- 1 But I remember us riding in my brother's car
- 2 Her body tan and wet down at the reservoir
- 3 At night on them banks I'd lie awake
- 4 And pull her close just to feel each breath she'd take
- 5 Now those memories come back to haunt me

6 They haunt me like a curse

⇒7 Is a dream a lie if it don't come true

8 Or is it something worse

第V連では、就職はしたが苦勞続きで昔の希望も消え、自分はそんな希望を忘れたかのように振る舞い、妻のメアリーもそんな希望はもうどうでもいいと投げやりだと語っている。6行目の don't は、she が主語なので doesn't とするのが標準的用法であるが、ここでは非標準形を使っている(5行目の don't と語呂合わせをしているのかもしれない)<sup>(6)</sup>。第VI連では、男は昔の楽しい思い出を語るが、その思い出が今は悪夢のように自分を苦しめると言う。7行目では「夢は叶わなかったら、ただの嘘なのだろうか」と自問している。ここでも doesn't となるべきところに非標準形を使っている。両例ともこの男の苦々しい体験からにじみ出る、本心を発露する言葉で、敢えて非標準変種で表現されているのであろう。

Biber et al. (1999 : 191) は、「会話での非標準の呼応 (non-standard concord in conversation)」というタイトルで会話データでの具体的な非標準呼応の使用状況を報告していて興味深い。例えば、標準形で “he doesn't” と言うべきところを “he don't” と言う割合が約 40% あると述べている。外国語として英文法を学習したものにとっては驚くほど高い数字である(蛇足だが、標準的な “I say” の代わりに非標準の “I says” という割合はさらに高く、約 50% となっている)。言語使用(特に話し言葉)の現実はそのほどに多様に富んでいて画一的ではないということを語学教員として心しておくべきであらう。

### 5.3 Those の代用としての Them

最後の非標準変種の例は、those の代わりに使われる them である。これも否定表現とは直接の関係はないが、上記の例(16)に2か所出ている

のでここで触れたい。ここで扱う them は曲を聴いているときには聞き逃しがちだが、歌詞を目で追うと際立つ。ジーニアス (p.2159) では、them の4番目の用法として「④略式 [名詞の前] 《those の代用；非標準的な用法とされる》」と記述されている。同様に、*LODCE* (p.1900) でも、them<sub>2</sub> として「話し言葉、those の意味で使われる。多くの人はこの使い方は間違っていると考えている (“*spoken* used to mean ‘those’. Many people think this use is incorrect”）」と記している。また、Biber et al. (1999: 1124) は、この them の用法を「会話の文法 (The Grammar of Conversation)」の中の非標準変種のひとつとして挙げている (二重否定、ain't, 主語・動詞の呼応の不一致などと共に)。上記の例 (16) から該当部分の2か所を取り出してみよう。

14 【The River, 1979】

V

⇒ 3 Now all them things that seemed so important

VI

⇒ 3 At night on them banks I'd lie awake

上記の例では、them はそれぞれ複数形の名詞の things と banks の前に置かれ、標準英語なら those となるところである。前者はその当時大切だと思っていたこと (今は跡形もなく消えてしまったが)、後者は二人で楽しいひと時を過ごした湖畔 (今となっては悪夢のように自分に取り付くが) をそれぞれ生々しく、リアルに描写する効果があると思われる。(例 (1) の4行目と5行目の “leave them kids alone” の them も同様の例である。)

## 6. 結語

本稿では、英語の歌詞に用いられた非標準変種の内、二重否定と ain't に焦点を当て、社会言語学と談話分析の視点からその特徴と働きを分析した。まず第2節では、非標準変種の特徴をまとめた。非標準変種には「潜在的威信」があると指摘されているが、それは社会的に低く見られている非標準変種を逆に望ましいと見なす意識を指す。潜在的威信の対象となる非標準変種を使うことは、それを使う仲間同士に「グループ内の連帯意識」を作り出し、心理的繋がり (rapport) を生む。対人関係の視点から見ると、潜在的威信を伴う非標準変種を使うことは、連帯意識を共有する人たちの間の「関わり促進 (involvement)」を強化することになる。

第3節では、二重否定の分析結果を示した。本稿で扱う二重否定とは、否定が繰り返され、かつ最終的な意味も否定となるものを指す。このような非標準変種の二重否定の使用は、標準変種に比べて有標な言葉遣いであり、それだけ聞き手の注目を集め、結果的にそこに込められたメッセージを強化する役目を発揮すると分析した。具体的には歌詞中での歌手の主張の強化や窮状描写の強化に繋がることが分かった。

第4節は、ain't の分析結果をまとめた。二重否定の分析同様、歌詞の中での ain't の主な機能はメッセージを強化することで、主張の強化を示す例、窮状描写の強化を表す例が確認された。一般に標準変種の使用が主流の談話中で非標準変種が使われる時は、その使用には標準変種の使用にはない意味が付加されると考えられる。本論のデータとなった歌詞でも同様で、歌詞の中で使用される非標準変種には、楽曲作者の特別な意味が含まれている。社会言語学の見地から明らかなように、非標準変種はネガティブな評価を受けることが多いが、歌詞中の使用では、潜在威信を持ち、仲間意識を創り出し、聞き手への働きかけを強化するという積極的な

機能があることが確認できた。

第5節では、上記以外の非標準変種を3つ取り上げた。それは There's (no) + 複数名詞、主語・動詞の呼応の不一致と Those の代用としての Them である。これらの非標準変種は必ずしも否定表現を伴うものばかりではないが、聞き手との「関わり促進」を強化する働きがあることが分かった。歌い手が聞き手にカジュアルに語り掛けたり、歌い手の本心を発露したりする場面で用いられ、それぞれのメッセージを生々しく、リアルに伝達する効果があると分析した。

本稿では、歌詞に用いられた非標準変種を分析したが、談話分析の視点からは、「声の多重性」と関連付けられるであろう。メイナード（2006：111-112）はロシアの文芸学者バフチンの「言語の対話性」という概念に基づき、「言語表現には常に複雑な複数の視点を代表する声が聞こえる」と述べ、「声の多重性（multivoicedness）」を説いている。歌詞の中にちりばめられた非標準変種は、まさにそのような「声の多重性」を示し、歌い手の本心・本音をありのままに相手に伝える新たな声（多くの場合社会の底辺にいる労働者や若者の声）、つまり弱者の直言の視点を歌詞に織り込んでいると考えられる。非標準変種は歌詞にそのような多様性を盛り込む役目を果たしていると言えるであろう<sup>(7)</sup>。

### 【今後の課題】

本稿での非標準変種使用上の機能分析では、まずメッセージの強化を一般的な特徴として挙げ、さらにその強化を①主張の強化と②窮状描写の強化とに2分類した。本稿が対象とした歌詞のデータでは、上記の機能分析の枠組みが概ね妥当であったが、他の機能や分類の可能性も常に視野に入れて研究をさらに進める必要がある。さらに他のジャンルでの非標準変種の分析との比較も今後の課題になるであろう。

《注》

- (1) 社会言語学では、どの言語にも標準変種 (standard variety) と非標準英語 (non-standard variety) があり、後者は地域性だけでなく、社会階層によっても規定されていると考える (岩田他 2022: 41)。
- (2) これに対して、標準変種が通常持つ威厳は顕在的威信 (overt prestige) と呼ばれる。
- (3) ここでの vernacular は、標準変種に対し、ある特定の地域、人種、社会グループ等が使う非標準変種を指す。
- (4) 二重否定が現れる文構造を精査すると、主語に一人称 (I と we) と二人称 (you) が使用される例が圧倒的に多かった (15 回中 14 回で全体の 93.33%)。このように二重否定を伴うメッセージの多くが、歌い手や聞き手に関するものになっていることが上記の強化機能と関係があるようだ。その中でも特に “I” が主語となっている例が 9 例と圧倒的に多く、歌い手が自分の思いを強調して伝えたい時に二重否定が使われる傾向が強いと考えられる。
- (5) データ中にはもう一例、there are となるべきところで there's が使用されている例があった。音楽を称賛する歌 (*Sir Duke*, 1976) の中で、音楽史上忘れてはならない 4 人の先駆者たちの名前が there's の後に 2 行に渡り列挙されている: “For there's Basie, Miller, Satchmo / And the king of all Sir Duke” (「ベイシー、ミラー、サッチモ、そしてみんなの王様、サー・デュークがいるから」)。このように後に単数名詞を列挙する場合は、there's がよく使われる (ジーニアス, p.2162) ので、これを非標準変種と見なすのは適当ではないであろう。
- (6) 査読者より、The Beatles の *Ticket to Ride* (1965) にも (But) she don't care という歌詞があるとの指摘があった。この曲は、本稿がデータとした 100 曲の選外であるが、13V の例と同様に、連を締めくくる最終行にあり、窮状描写の強化に使用されている。
- (7) メイナード (2004: 96) は、日本語の普通体 (ダ体) と丁寧体 (デス・マス体) の混用をスタイルシフトと捉え、そのメタメッセージ機能に注目したが、このスタイルシフトの見解は本稿の分析にも採用できそうだ。また、社会言語学の観点からは、標準・非標準変種間のコードスイッチング (code-switching) が起きていると分析することも可能であろう。

参考文献

東照二. 2009. 『社会言語学入門』(改訂版) 東京: 研究社.

- Biber, Douglas, et al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow, Essex: Longman.
- Cheshire, Jenny. 1991. "Variation in the Use of *Ain't* in an Urban British English Dialect." In *Dialects of English: Studies in Grammatical Variation*, ed. by P. Trudgill and J. Chambers, 54-73, Harlow, UK: Longman.
- Holmes, Janet and Wilson, Nick. 2022. *An Introduction to Sociolinguistics* (6th ed.). London and New York: Routledge.
- Huddleston, Rodney and Pullum, Geoffrey K. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 岩田祐子, 重光由加, 村田泰美. 2022. 『社会言語学 — 基本からディスコース分析まで』(改訂版) 東京: ひつじ書房.
- メイナード, 泉子・K. 2004. 『談話言語学』東京: くろしお出版.
- Swann, Joan, Ana Deumert, Theresa Lillis, and Rajend Mesthrie. 2004. *A Dictionary of Sociolinguistics*. Tuscaloosa, US: The University of Alabama Press.
- Tannen, Deborah. 1989. *Talking Voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tottie, Gunnel. 1991. *Negation in English Speech and Writing: A Study in Variation*. San Diego: Academic Press.
- Yamada, Masamichi. 2003. *The Pragmatics of Negation: Its Functions in Narrative*. Tokyo: Hituzi Syobo Publisher.
- 山田政通. 2004. 「メタ言語否定の談話分析」『拓殖大学語学研究』107号, 45-69.
- 山田政通. 2007. 「語用論から見た否定の世界: 談話機能の視点から」『拓殖大学語学研究』114号, 37-58.
- 山田政通. 2023. 「否定表現の談話分析 — 英語の歌詞をデータとして —」『拓殖大学語学研究』148号, 189-222.

### 【参考辞書】

- ジーニアス = 『ジーニアス英和辞典』2023 (第6版). 東京: 大修館.
- LDOCE = *Longman Dictionary of Contemporary English*. 2014 (6th ed.). Essex, UK: Pearson Education Limited.

### 【英語の歌詞】

- ① 草野夏矢. 2010. 『洋楽超定番ソングブック 100』東京: シンコーミュージック.

ジック・エンターテイメント.

- ② 松山祐士. 2010. 『50・60年代オールディーズ名曲全 (Oldies'50s-'60s Best Collection)』東京：ドレミ楽譜出版社.
- ③ 松山祐士. 2010. 『70・80年代ニュー・オールディーズ名曲全集 (New Oldies '70s-'80s Best Collection)』東京：ドレミ楽譜出版社.

(原稿受付 2023年10月23日)